ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第38号　2018年2月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　「大学が壊れる」を読んで	松嶋　哲哉	2
逸話と世評で綴る女子教育史（38）　―築地の海岸女学校―	神辺　靖光	4
服部嘉香旧蔵の早稲田大学専門部ファイルから ―1938年の早稲田大学専門部入学生に対する注意―	谷本　宗生	8
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考③ ―仏教系私学・真言宗を事例として―	雨宮　和輝	13
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（37） 学校沿革史にみる補習科・専攻科（33）：岡山県（6）	吉野　剛弘	16
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（9） ―日本大学企画広報部広報課―	田中　智子	21
吉田寮の教育的役割を一般的な資料で説明する試み	冨岡　勝	26
刊行要項（2015年6月15日現在）		32
「短評・文献紹介」欄の新設について	編集世話人	33
会員消息		34

コラム
「大学が壊れる」を読んで

松嶋（まつしま）　哲哉（てつや）
（日本大学　研究員）

「大学が壊れる」。このような記事が『週刊東洋経済』（2018年2月10日）で特集されていた。この特集では、日本の大学の危機として、国立大学の格差・困窮化と私立大学の「2018年問題」（＝18歳人口の減少）が取り上げられている。記事の細かい点は、雑誌を見ていただきたい。

この特集記事の中で筆者が特に気になった論点が、「研究劣化の真相」が研究資金の配分に「競争原理」が導入されたことによって、「一部のトップ大学」に資金が偏在することによって「中間層の大学が零落」し、生き残りをかけた大学は「大学改革」迫られることによって教員を疲弊させていることにあると分析しているところである（ただし、この特集で「研究劣化の真相」の分析範囲は国立大学のみである）。

「競争原理」の導入は、2004年の国立大学の独立行政法人化に始まる。国は、国立大学に「運営費交付金」を配布しているのだが、これが年々削減している。このあおりを受ける形で、研究費は削減されている。研究者は、その代わりに官民の競争的資金制度で研究費を調達する必要があるのである。

続いて特集では、「地方国立大の危機的貧困」として研究者のインタビューを交えながら「悲惨すぎる実態」を報告している。そこで、ある地方国立大学の教員は、「研究費はたかだか年50万円。つまり450万円足りない」と述べる。別の教員は、研究費として年180万円必要にもかかわらず、2017年度から研究費は30万円になり、「電気代すら到底届かなくなった」と述べている。ちなみに、文部科学省による「個人研究費等の実態に関するアンケート（2016年7月）において、10年前と比較すると個人研究費が減っている（減っている+大きく減っている）と感じている国立大学の教員は、60%である。これに対して、国立大学の教員のうち研究費が増えていると感じてるのは8%、「概ね同じ」は15%である。

この特集は、国立大学の理系の教員の事情を中心に分析されており、「文系の事情も扱ってくれ」と思ってしまうが、概ね大学関係者は特集記事の内容に共感できるのではないだろうか。このような「大学の困窮化」自体は多く指摘されているし、問題化されている。しかし、筆者がこの特集記事の中で最も目を引いた記事は、「競争的資金重視政策の生みの親」でもある財務相主

計局次長・神田眞人のインタビュー記事である。そのタイトルは「大学の封建性、閉鎖性こそ問題」である。

神田は、このインタビューで、日本の大学の研究力低下原因として「大学の封建的、閉鎖的な体質」を指摘し、日本の大学の財政は「多様な財源を擁する」必要性を主張している。研究力低下については、「生産性が低いことが問題」であり、その原因は「大学の封建的、閉鎖性」にあり、「オープンイノベーション、学際研究、グローバル研究の時代に不利となり、また非競争的環境の中で、活力を喪失するモラルハザードが生じている」と指摘する。運営費交付金の削減については、「減少の多くは附属病院の赤字解消や退職手当減といった特殊要因で、実質的にあまり減少していない。一方で補助金は増えて」いると答える。そして、「運営交付金にこれほど依存しているのは日本だけだ」と指摘し、海外の国公立大学の事例から「多様な財源を擁するのが世界の強い大学の常識」であり、「運営費交付金の中でも横並びの悪平等ではなく、成果や努力に応じて競争的に配分する予算を増やしているところだ」と述べる。

さて、このような神田（≒財務省）の理論に対して、「反感」を持つ大学関係者は多いと思われるが、この理論に対して論理的な反論を行えるだけの理論を大学関係者は持っているのだろうか。「このような「新自由主義」的政策はケシカラン」などとの批判のための批判など無意味である。「競争的資金の導入によって中間層が減った」「競争によっていい研究は生まれない」などの批判は、共感的には理解できるが、競争と研究の間の相関関係は認めれても、因果関係は実証しづらいため、財務省への反論理論としては弱い。そのため、財務省からは「大学の封建性」こそが問題だと、容易にかわされてしまう。

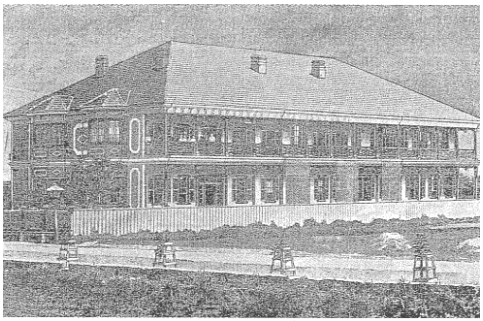
近年、マスコミなどによって、大学の危機的な状況が報道されるようになってきた。確かに、大学の状況は年々厳しくなっていく。それを否定する大学関係者は少ないであろう。しかし、このような状況に対する改善策を示すための理論はどれだけあるのだろうか。大学の危機的な状況が多く報道されつつある現在だからこそ、私たち大学関係者は報道レベルの議論ではない議論を展開していなければならないのではないだろうか。もちろん、そのような研究は蓄積されてきているのかもしれない。今後、大学の状況が好転していくことを希望したい。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（38）

―築地の海岸女学校―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）



海　岸　女　学　校

三田の大聖院に居られなくなったスクーンメーカーの救世学校はメソジスト派の宣教師ソーパーの斡旋で、築地の外国人居留地内・明石町10番地に土地を購入し、ここに新しい校舎を建てた。隅田川河口で東京湾が望めるので海岸女学校と名づけた。明治10年8月26日の「朝野新聞」に次の広告がでている。

報告　本女黌に於て従来、英学正変則並に漢学教授候処、今回更に裁縫並に洋楽（オルガン）等の諸科を加へ諸学則を革正し、以て来る9月3日より開学す。因て謂ふ有志の諸君来学あらんことを。

概則

一、入塾生は月俸月謝共に一ヶ月金三円なり。蓋し洋楽望みの者は一円を増納すべし。

一、通学生は月謝一ヶ月金五十銭なり。尤も洋楽兼学の徒は同上、但し入塾通学共束脩金を受けず。

一、女黌たりと雖も十四歳以下の男児は通学を許す。

一、貧窮にして修学望みの女児は其情実に因り、月謝月俸は勿論、衣類等迄を授与す。

一、其他諸規則等は来尋を乞ふ。

10年8月22日、東京築地明石町10番地

海岸女学校

三田の救世学校でやった授業を整えて、英学を正則（英語を学ぶ）、変則（翻訳書で学ぶ）に分けて教え、漢学も教え、さらに裁縫や洋楽器オルガンも教えるというのである。授業料は通学生は1ヶ月50銭、入寮生は月俸（食費代）を含めて3円という。月謝50銭を引くと食費は1ヶ月2円50銭となる。当時、東京の平均的下宿代である。月謝50銭は、通常の英学塾、英学校より極めて安い。クリスチャン学校だからである。貧困生徒に月謝月俸はもとより衣類まで支給するというのも、後の給費生制度で宗教学校の面目を想わせる。女学校であるが、14歳以下であれば男子も入学させるというのは、女子だけでは学校がなりたたないから少年であれば人数合わせで入学を許すというこの時期の風潮である。

開校後間もなく寄宿生21人、通学生11人となり、翌年には校舎が手狭になるほど生徒が多くなった。開校直前には伝導局派遣の婦人宣教師ホワイティング.Olive Whitingが教師に加わり、明治11年10月にはさらにスペンサーM.A.Spencer、ホルブルックM.J.Holbrookが加わって教師陣が強化された。ここにおいてスクーンメーカーは校長職をホワイティングに譲り、イリノイ州で彼女の帰りを待つ病気の母親を看護するため帰国することになった。明治

12年秋、彼女を慕う生徒達と新橋駅頭で別れ、スクンメーカーはアメリカに帰った。

その直後の12年10月、海岸女学校に不幸が襲った。10月26日、その日は西北風が激しく屋根瓦を吹き飛ばす程であったが、昼過ぎ、日本橋箔屋町から出火して忽ち京橋、築地に移り鉄砲州まで飛火した。焼けた家6,000戸、佃島に繋留した漁船までも焼けただれる猛火であった。築地明石町外国人居留地にあった海岸女学校も、この猛火にあおられて、あっけなく全焼した。仕方なく、海岸女学校は銀座にあったキリスト教系の旧原女学校（本稿シリーズ22参照）の空家に移転した。

銀座の仮校舎時代のことについては卒業生・飯久保ふゆの回想記がある（青山女学院校友会報115）。それによると木造2階建の仮校舎は階上は教員室と上級生の教室、階下は講堂兼低学年教室で廊下続きに、これも2階建の別棟があって、ここが寄宿舎になった。階上の4室のうち一室が自習室で他の3室が寄宿生の部屋、階下が舎監室と食堂であった。授業は海岸女学校時代と同じであったが、新たに金曜日午前の聖書暗誦と午後の裁縫編物が加わった。これの指導にはミス・スペンサーが当ったが、生徒の忘れ得ぬ想い出として追想されている。はじめてのアメリカ流編物だが何度もやり直しさせるきびしくも丁寧な指導であった。

築地の焼跡ではじまった新校舎建築工事は順調に進み、明治14年9月には完成して海岸女学校が再開された。新校舎は隣の13番に建てられ、焼跡の旧校地は運動場になった。総工費1万ドル、2階建西洋館で生徒の収容能力100内至150人、別に50人収容の寄

宿舎もつくった。9月13日の献堂式には松村東京府知事、ビンガム米国公使以下名士が列席した。

この年末、校長ホワイティングは結婚して引退、代ってホルブルックが校長になった。明治17年には新任のアトキンソン校長以下、有能な女教師が次々に派遣され、19年には志願者を打ち切らねばならぬほどに活況を呈した。20年の「女学雑誌」は「女学教場の取拡げ」と題して「築地13番館女学校は生徒日々に増加し、是迄の教場にては手狭なれば、今度14番館も借入れ、運動・縫物・調理の3教場を取設くる筈なりとぞ」と記している。21年には青山の地に校舎をたてて東京英和女学校と称し、やがて青山女学院になる。

それにしても築地の焼跡に新校舎をたてるためにポンと1万ドルを出したり、有能な女校長、女教師を次々に派遣してくるメソジスト・エピスコパル教会婦人外国伝導局とは何者か、次回に述べよう。

参考文献『青山女学院史』
神辺靖光『明治初期・東京の女学校』

服部嘉香旧蔵の早稲田大学専門部ファイルから
―1938年の早稲田大学専門部入学生に対する注意―

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

今回は、古書店の泰成堂書店から購入した、早稲田大学教員を務めた服部嘉香（生1886～没1975年）旧蔵の早稲田大学専門部ファイル（縦30cm×横23cm×厚3cm）から、とくに1938年の「[早稲田大学]専門部入学生に対する注意」を紹介したいと思う。

なおこの資料ファイルが服部嘉香旧蔵であることは、早稲田大学から服部嘉香宛てに出した「今般当大学を御退任されましたので左記の通り慰労金を差上げること詮議されましたから御通知いたします　記　一金〇〇万〇〇〇〇円也　但し退職慰労金〇〇万円　高田基金〇〇〇円　出版部基金〇〇〇円　昭和31年4月30日（〇は谷本による伏字）」といった通知資料などが含まれている点からも明らかであろう。

本稿で紹介する、1938年4月の早稲田大学専門部入学生に対する注意は、服部嘉香旧蔵のファイルに丁寧に貼り付けられているものである。「専門部入学生に対する注意」は、冒頭文と学習心得、通学心得、入学手続きから構成されている。その冒頭では「早稲田大学専門部は、大学部と相並んで、我が国高等教育の重要なる一部門を占め、多年国家に貢献して来たのであるが、其の使命とする所は、修学年限三ケ年の間に、須要なる専門の学術を極めて有効に教授すると同時に、模範国民たるの自覚、人格、教養を具備する国家有為の人材を育成するに在る。随つて専門部は大学教育の縮

図的機関であるが、特に学問の実化、活用と人格の陶冶発揚に重きを置く所に独自の面目がある」などと記されている。

学習心得では「教科書　教科書は掲示場に掲示せられるから、授業開始前に漏れなく用意せられたい。殊に輪講の英語、論文の教科書は急ぎ購入せられるのがよい。其の他の講義科目は主として専門学の講義であつて、特に講義の要領を予め学生諸君に了解させ、その自主的研究を促すため、夫々担任教授に於て一定の教科書又は参考書を使用されるのであるから、学校の掲示並びに担任教授の指定ありたる際は、遅滞なく購入せねばならぬ。担任教授の指定せざる所謂『プリント』類は誤謬の甚しいものがあるから、絶対に用ひてはならぬ。…試験　科目により十月中旬に前期試験を行ふものもあるが、大体一年一回二月から三月にかけて学年試験を行い、何れも出席点を加味することによつて居る。随つて所謂試験勉強は殆ど効果がない。平常必ず授業に出席し、各科目の予習及び復習に注意し試験に際して狼狽しないやうにせねばならぬ。…諸種の会　大学には諸種の学会、趣味の会、運動の会等があつて授業以外に色々活動して居るから自由に入会されるが良いが、当専門部の政治経済科には稲政会、法律科には稲緑会、商科には商科学友会と称する専ら学生諸君の交友機関の設けがあり、それに夫々入会する事になつて居り、それ等の会では夫々旅行、見学、講習、運動、雑誌刊行等の事業を行つて居るから諸君は自治訓練の為、学生生活充実の為、進んで参加努力せられたい」などとしている。

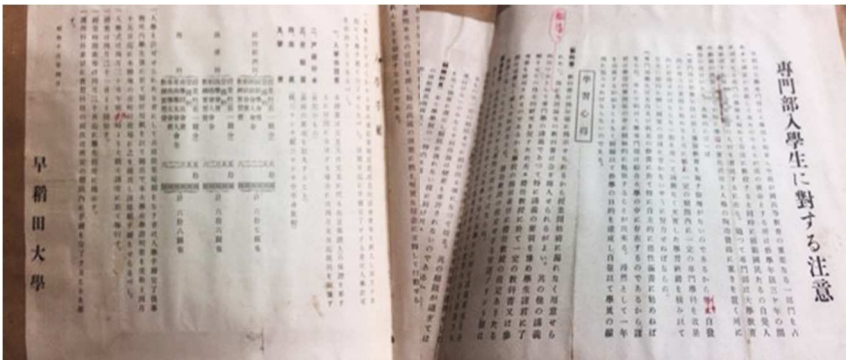
通学心得では「学生証　入学手続完了の際交付せられる学生証は、早稲田大学学生たる身分を立証するものであるから、特に取扱を丁重にし、校の内外を問はず常に携帯して居なければならぬ。

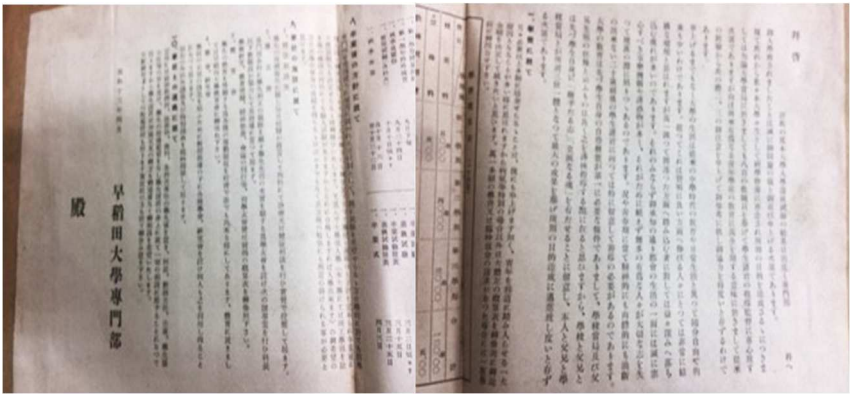
且つ自己の写真を貼付しないものは無効であるから、本証受領と同時に必ず規定寸法の写真を貼附[ママ]して学校の検印を受けることを忘れてはならぬ。服装　常に恩師長上に対する礼儀を重んじ、容姿の端正を期し、殊に登校の際は成規の制服制帽の着用を厳守せねばならぬ。病気其の他万已むを得ざる場合には、必ず和服着用の許可を受け、必ず制帽、袴を着用し、草履のこと。…出席　授業には常に出席点呼を行ふから、欠席又は遅刻のないやう注意せられたい。欠席の場合には、其の都度理由を具し欠席届を事務所に提出しなければならぬ。無届欠席があつたり余り欠席の多い者は、学則に基づき除籍することになつて居る。健康相談所　校内に健康相談所を置き、毎日校医が出張して無料相談診療に応ずることになつて居るから、大学より交付する健康票を常に携帯し、気分の悪い時は勿論、其の他遠慮なく相談に行き、常に保健衛生に注意せられたい。宿所及ビ住所届　本大学には寄宿舎の設けはない、随つて通学には、他家又は下宿屋等に寄宿する必要があらうが、それ等に就いて相談があれば、学生係で遠慮なく相談せられたい、而してその通学住所は移転毎に必ず事務所に届け出でねばならぬ。住所不明のため往々身分上其の他意外の手違を生ずることがあるから、手落[ママ]のないやうにせられたい」などと明記されている。

入学手続では「一、入学を許可せられたる者は左記書類、写真、授業料、諸会費等を納入し、四月十日迄に入学手続を完了せらるべし。該期日迄に手続完了せざる者は入学許可を取消すことあるべし。…一、入学式は四月二十日午前九時より大隈大講堂に於て挙行す。一、授業は四月二十一日より開始す。一、授業時間表等は四月二十日迄に学生控所に掲示す」などと記されている。

さらに1938年4月、早稲田大学専門部は入学者の父兄らに対しても、幾つかの注意事項を挙げて協力要請を行っている。「学費に就て」では「月々必要以上多額に送金せらるることは、後にも申上げます如く、青年を邪道に踏み入らせる一大原因となることが多い様に思はれますから病気等特別の場合以外は大体左の概算表を御参考に御送金額を決定して戴きたいと思ひます。万一多額の学資又は臨時送金の請求があつた場合には一応学校に御問合せ下さい」などとしている。「宿所に就て」では「…特に御注意申上げ度いのは最近アパートが増加し、学生中にも相当に之を利用して居る者がありますが、アパートは小さな一軒の家を借りて居るのと同じで中には気儘過ぎて却て悪結果を来す者も少くない様に思はれますから、若し御子弟でアパートを居住の希望の場合や其他宿所に就て御心配の場合は一応学生係へ御照会下さい」としている。「交友関係に就て」では「中等学校と異り多くは家庭を離れて勉学中ですから友人の無いことは淋しいことですが、地方出の純な青年も誘惑の多い都会にては往々にして悪友に誘はれ喫茶店、玉突、麻雀等に出入し更に進んではダンスホール、遊郭等に迄遊び学業を疎かにし中には病毒に悩む者も珍らしいことではありませんから友人関係には特に御注意を希望いたします」としている。「学業成績に就て」では「当専門部の試験は大部分三月に行ひ其成績は同月末迄に御通知致すことにして居ますが御不審の場合は御問合せ願ます。尚十月中旬には数科目に就て一度試験を行ひますから此の成績は十一月頃御問合[ママ]下されば御知らせいたします」などとしている。「日課に就て」では「授業は大体午前八時より始め午後三時には終ることになつて居ますが特別の場合（一週一、二日位）午後五時迄の日もあります。自宅よりの通学の御家庭にては帰宅の時間

等御注意下さい」としている。注意事項の最後に挙げてある「学校との連絡に就て」では「当部には政治経済科、法律科、商科、各科共専任の学生係を置き、科長、教務主任、主事、学生係主任等の旨を受け、学生の指導監督をなし学生諸君の身上に就て一切の相談に応ずることになつて居りますから学生諸君は勿論父兄の御方も御遠慮なく御相談を希望いたします。又教練指導としての配属将校も居ります事故此の方も併て御含み置き下さい」と明記している。これらをみると、父兄らとの意志疎通や協力体制もつよく意識していることがうかがえよう。





明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考③
―仏教系私学・真言宗を事例として―

雨宮（あめみや）　和輝（かずき）（早稲田大学）

はじめに

筆者はこれまで、1918年の大学令による宗教系私学の大学昇格に着目してきたが、それより以前の宗教系私学の実態に関しては言及してこなかった。そこで、今号でも、大学昇格以前、明治時代以降の宗教系私学及び宗教界にどのような動向があったのかを分析する。本号では真言宗と、真言宗を母体とする高野山大学の大学昇格以前の実態を明確にすることを試みる。

1、真言宗における教育機関設立と宗派内部での対立

では、真言宗を母体とする高野山大学はどのような経緯を経て設立したのだろうか。まず、今号では真言宗派内の複雑な動向を整理しながら、真言宗における教育機関設立の経緯を明確にする。

まず、真言宗の教育機関として1877年に高野山大学林が開設される。そして、この高野山大学林は1885年には真言宗古義大学林と改称される[1]。さらに、設立された翌年の1886年には、真言宗は古義派と新義派のそれぞれの宗派が大学林を設立することになった[2]。『高野山大学百年史』では、古義大学林の教育目的に関して「その本分は、真言宗僧侶の養成にあった」[3]と述べられている。

このように真言宗では明治時代における教育機関設立に際して、宗派に分かれて教育機関が設立されていた。さらに、1896年頃からは真言宗の本山である高野山金剛峰寺が他の宗派から独立する運動が盛んになる[4]。その後、真言宗内の会議により、高野山金剛峯

寺、智積院、豊山長谷寺が独立して、宗派内部における教育機関を取りまとめることになった[5]。これを契機として、古義派は本山である高野山、新義派は智山派及び豊山派真言宗の宗派が、それぞれの教育機関を管理することになったのである。ただ、こうした古義派と新義派の対立と並行して、古義派内では一つの宗派としての合同を維持する派閥と、分離を主張する派閥が対立することになっていく。この宗派内部における対立は真言宗における教育機関の発展と共に、より顕著なものとなっていくのである。

おわりに、

今号では真言宗を母体とする高野山大学の設立以前の経緯を分析するために、大学林設立と、真言宗派内部における対立について分析した。これまでも筆者は他の仏教系私学に関して、大谷大学が東京と京都の2つの都市に教育機関を設立し、宗門と大学が対立した経緯を分析している。しかし、真言宗においては、高野山を中心とする古義派と、智山派・豊山派を中心とする新義派がそれぞれ別の教育機関を設立した上で、さらに古義派内部において、高野山を中心として独立を主張する派閥と、古義派の各宗派が合同で宗派を維持していこうとする派閥に分かれていた。このように真言宗の教育機関の設立の経緯は、宗派内部における派閥の対立の影響を強く受けてきたと見ることができるだろう。

注

――――――――――――

[1]高野山大学百年史編纂室『高野山大学百年史』(1986)95頁。

[2]新義真言宗に関しては、村上重良『日本宗教事典』(1978)180頁を見ると、興教大師である覚鑁が提唱した仏教思想をもとに発展

した宗派であることが説明されている。真言宗豊山派及び智山派は新義派の二大宗派とされている。また、新義真言宗に対して、空海が開いた教えを中心とする真言宗を古義真言宗と呼ぶ。

[3]高野山大学百年史編纂室『高野山大学百年史』(1986)102頁。

[4]高野山大学校友会会長和田性海『高野山大学五十年史』(1936)82頁。ここでは高野山の独立に関して「明治以降の真言宗政史を見るに、高野山は常に単独立の傾向強く、合同は職繋の名の下に他の覇絆を受けることを潔しとせなかつた」として、旧来から高野山大学には独立の志向があったことを述べている。

[5]高野山大学百年史編纂室『高野山大学百年史』(1986)117頁。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（37）
学校沿革史にみる補習科・専攻科（33）：岡山県（6）

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（東京電機大学）

今号では、岡山県の補習科がどのように受け止められていたかを検討する。

岡山操山高等学校の沿革史では、同校の1996（平成8）年の『進路の手引きⅡ』に掲載された補習科修了者の手記が転載されている。いささか長くなるが、以下に全文を引用する。

「補習科について」

岡山大学教育学部小学校教員養成課程教育心理専修　氏家寿子

この進路の手引きを手にしているのは、多分、現役生の方だと思います。みなさんは補習科なんて自分には関係ないところだ！なんて思っていませんか？　私もまさか自分が浪人せざるを得ない状況になるとは思っていませんでした。しかし、現実、私たちの学年で四五〇人中、一二〇人余りの人がお世話になりました。つまり全体の約四分の一です。それでは、何年間後かに高校生活4年目をむかえる人のために、補習科について話をしましょう。

＜補習科の利点＞

・友達も先生も知っている人ばかり。

これは意外と大きいポイント。予備校では友達、先生との関係、授業のうけ方、生活面などに慣れるまで大変。浪人生はそ

んな余分なエネルギーをつかっている暇はない。

・授業のあき時間がある。

　予備校では朝から晩まで授業がつまっていて、予習、復習だけでも手いっぱいになるそうです。やはり成績が伸びるのは自分で計画的に学習したときです。自分の時間を有効に使えるという利点があります。

・夏休み、冬休みの教室の開放

　リズムをくずさないためにも、利用すべし。

・なんといっても授業料が安い。

・冷暖房の完備

＜補習科のいやだったところ＞

・私服で現役生の中に混って生活しなければならないこと。

　制服でいるのもいやだが、私服だと一目で浪人生とばれてしまう。じろじろ見られてはずかしい。終わりのころには慣れてしまうが……。

　私が気がつくのはこれくらいです。あと浪人生活のポイントは、悩みを打ち明けられる友人、一緒にバカさわぎしてくれる友人を持つことです（浪人生同士がベスト）。精神的につらい時なんか、傷をなめあうのではなく、励まし合ったり、将来の夢についてかたり合ったり、お互いに高めあう絶好の時期です。浪人して精神的に成長するってよくいわれますが、物の見方っていうと大げさかもしれませんが、自分の考え方が変わったのは確かです。浪人生活は精神的にはきついですが、物理的には自

由なので、自分の自由な時間を自分の好きなように使えます。多分みなさんが考えているよりも浪人生活は明るいものだと息います。もちろん、“浪人しよう”と勧めているのではありません。日ごろの勉強の積み重ねが大切。大学入試はなんとかなるなんてウソ。高校入試と違ってきびしい。特に中堅の国立大学希望の方は、絶対センターを甘くみないこと。基本だから絶対点はとれるってへんな自信を持たないで下さい。遅くても十月ぐらいからは、マーク中心の勉強にきりかえること。

補習科についての以上の話がみなさんには無用となることをお祈りしています。

（創立百年史編集委員会編『創立百年史』（岡山県立岡山操山高等学校創立百周年記念事業実行委員会,1999）,p.316）

受け止め方には主観が入ることには注意を要するが、そのようなことを勘案してもなお特徴といえるのは、現役時との連続性と授業料の安さということになるだろう。筆者の言うように、浪人時は勉学に集中することを最優先にすべきであり、新たな環境への適応に余計なエネルギーを使うことは得策ではない。

授業の空き時間については、第35号で検討した教育課程をみると、補習科の方が余裕がないようにも思えるが、予備校では単科ゼミのようなものを取ることも多く（殊に代々木ゼミナールはその傾向が強い）、最終的には補習科の方が余裕があるという結論になる可能性は十分にある。

一方の学校側はどのように考えていたのだろうか。以下に示すのは、岡山芳泉高等学校の沿革史に記された補習科の特色である。

本校補習科の特色

1.服装・生徒心得などは、在校生に準じたものとする。

2.受講資格はその年の卒業生に限る。(この規定は昭和54年より)

3.3年生と同じ校内実力考査(年4回)受けることにより、高校在学中の学力と比較し、本人の3年生の時からの学力の伸びをとらえやすくしている。

また、校外模試(年10回程度)により、全国的なレベルも把握できる。

4.個々の生徒を熟知している在学中の担任団が中心となり継続的に指導するので、より適切な指導が受けられる。

(創立三十年誌編集委員会編『創立三十年誌』(岡山県立芳泉高等学校創立30周年行事委員会,2003),p.136)

本校補習科の特色

1.はじめは、制服着用だったが、途中から私服でよい事になる。

2.3年生と同じ実力考査を受けることができ、3年生の時と比較して学力の伸びを把握できる。

3.生徒を3ヵ年教えて来た先生方が中心になって、継続して教科指導にあたるので、綿密でかつ適切な指導が受けられる。

4.週5日間の授業で、体育も実施して、身心ともに健康的に“浪人生活”を送ることができる。土曜日は、校外模試などで利用している。

5.春4月下旬にみんなで遠足をする。ちなみに平成10年度

は、蒜山で遊んだ。

（岡山一宮高等学校編集委員会編『創立二十年史』（岡山県立岡山一宮高等学校,1999）,p.109）

成績の比較や生徒理解の深さなど、ここでも強調されるのは現役時との連続性である。また、岡山一宮高等学校では、体育の授業の存在も、健全な浪人生活に必要なものとして強調されている。

新たな学校に移るたびに、新環境への適応は問題となるし、むしろその適応の過程が人を成長させる側面があることも事実である。しかし、予備校への適応はそうは見なされないということであろう。

予備校の不在といった、物的な側面が補習科のニーズを支えたことも事実だが、環境変化への忌避という心的な側面もまた補習科のニーズを支えていたということは、大変興味深い。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド（9）

―日本大学企画広報部広報課―

田中（たなか）　智子（さとこ）（早稲田大学大学史資料センター）

前回に引き続き、今回も事務部局の一部として大学アーカイブズ業務を行っている事例を紹介したい。今回紹介するのは日本大学企画広報部広報課である。なぜ広報課が大学アーカイブズ業務を担っているのか。以下、その経緯も含めて述べていく。

（1）基本情報

日本大学企画広報部広報課は、日本大学芸術学部所沢校舎に隣接する本部所沢校舎（旧総合学術情報センター）1階にある。その歴史は1978年に『日本大学九十年史』編纂のために大学史編纂室が設置されたことにさかのぼり、その後大学史編纂課と名称を変更している。2010年に資料館設置準備室と統合され、引き続き大学史編纂課という名称であったが、2016年より企画広報部広報課に吸収され現在に至っている。以上のような経緯から、日本大学においては広報課が大学アーカイブズ業務を担っているのである。ただし、主に広報業務を担う法人本部（市ヶ谷）の広報課とは異なり、所沢にある広報課は大学史編纂を主な業務としている。

以上のように、所沢にある広報課は大学史編纂を主な業務としているが、他の大学アーカイブズと同様、資料の照会・閲覧等の業務も行っている。開室時間は基本的に平日の9時から17時まで（昼休み12:00～13:00を除く）であり、学外者でも利用可能である。ただし、資料の出納等に時間を要するのと、広報課のある本部所沢校舎

の建物自体が一般に開放されてはいないため、事前予約制をとっている。後述する問い合わせ先に連絡のうえ、閲覧予約をしていただきたい。

（2）資料紹介

広報課所蔵資料の大部分を占めているのは、施設関係の資料である。これは校舎等を建て替える際、廃棄予定の資料を広報課がもらい受けてきたためである。この他、法人文書や個人文書など様々な資料を所蔵しているが、この中で筆者が紹介したいのは以下の3点である。

1点目は戦前・戦中期の「教務関係書類綴」である。これは表題通り教務関係の書類を綴じたものであり、多くは文部省との往復文書である。同課には1933年から1943年分まで保存されており、中身を見ると当初は入学・卒業や学則変更に関するものなど通常の教務関係書類が多数を占めているが、日中戦争の始まる1937年頃になると、御真影奉拝や学校教練、皇道講座設置関係など戦時体制に関連する書類が増加してくる。こうした変化を追うことによって、当時の大学における軍国主義の受容の過程を明らかにすることも可能になろう。また、立教大学「庶務課文書」群（本ニューズレター第33号参照）や専修大学「文部省発来翰」（同第36号参照）など、他大学に残されている同時期の文部省との往復文書群と比較することによって、戦時下におけるそれぞれの大学の対応の特色を探ることも可能になる。

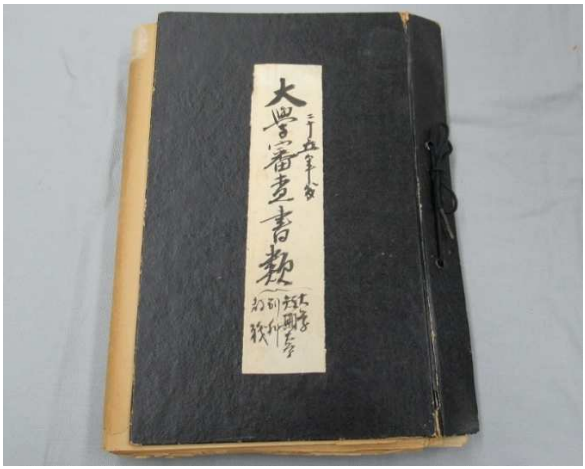
【写真1】「教務関係書類綴」

この「教務関係書類綴」と合わせて参照したいのが、2点目の「学事統計綴」である。これは入学志願者・現在学生生徒数・卒業者数などの統計の原本のみを集めたものであり、「教務関係書類綴」と同じくらいの時期・分量が残っているようである。統計類のみを参照したい場合は、こちらを閲覧するのが便利であろう。

【写真2】「学事統計綴」

3点目は、「加藤一雄関係資料」群である。加藤一雄は戦前期、同大学の学監等を歴任し、敗戦後の1947年に大学基準協会が設立された際には事務局常任理事に就任し、翌48年には日本私学団体総連合会常任理事にも就任した人物である。このため、同資料群は大学基準協会や私立大学協会関係の資料が大部分を占めており、中でも、新制大学・大学院の審査に関する書類が多数含まれている。【写真3】はそのうちの一つであるが、この簿冊一冊の中にも様々な大学・短期大学等の審査書類が綴じられており、新制大学の審査の過程がわかる大変貴重な資料となっている。

【写真3】「大学審査書類」（加藤一雄関係資料）



（3）資料へのアクセス方法

以上、日本大学企画広報部広報課の所蔵資料について紹介してきた。これらの資料へのアクセス方法であるが、同課は資料目録を

作成してはいるものの、インターネット等で公開はしていない。そのため、基本的には閲覧したい資料、調査したい事項を電話・メールで伝えて、同課職員に資料を探して出納してもらうかたちをとる。同課の連絡先は下記の通りである。

電話：04-2996-4555／FAX：04-2996-4592

メール：nuhistory@nihon-u.ac.jp　　（つづく）

吉田寮の教育的役割を一般的な資料で説明する試み

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

以下は、京都大学の学生寮である吉田寮のパンフレットに寄稿した文章である。前号の会員消息で簡単に紹介したように、築100年以上の吉田寮は、現在、廃寮問題をめぐって注目を集めている。

2月13日には、寮生や学内外の大学教員などの呼びかけで「立て看・吉田寮問題から京大の学内管理強化を考える」と題したシンポジウムが京都大学吉田キャンパス内で開かれて、寮生や学内外の大学教員らが参加するシンポジウムが開催されている（「京大　吉田寮退去を問う　有志、教員ら呼びかけ　シンポ」『毎日新聞』2018年2月21日、京都版 https://mainichi.jp/articles/20180221/ddl/k26/100/430000c）。

そんな中、筆者自身も学生時代にこの寮に住んでいたこともあり、寮生のつくるパンフレットに寄稿する機会を得た。現在・過去・未来の寮生を含む、吉田寮に関心をもった人々が、この問題について語りあう際に、寮の歴史や教育的意義を考えるための資料についての情報を共有しておくことは、いくらか意味のあることではないかと考えて書いてみた。本ニュースレターの趣旨とも共通するところがあるのではないかと考え、紹介することとしたい。

吉田寮の教育的役割を一般的な資料で説明する試み

冨岡　勝

（1983年～1989年在寮）

寮生（現在の寮生はもちろん、未来の寮生や元寮生も）が、同級生・教員・保護者などを始め様々な人たちに吉田寮の寮生活に関して理解や協力を求める際に、その教育的な意味について、寮内での個性的な経験や知見を通してだけでなく、ごく一般的な資料も味方につけて説明できるようにしておくことは、メッセージの説得力や広がりの面から、多

少は意味のあることだと思う。

1.京都帝国大学寄宿舎での教育施設としての寄宿舎重視

吉田寮の歴史は、1897年（明治30年）の京都帝国大学創立とともにつくられた学生寄宿舎に遡ることができる。1906年（明治39年）1月には、初代総長の木下広次から発せられた告示で、寄宿舎が「学生ノ研学修養上重要ナル一機関」、つまり教育的意義をもった施設であることと、その目的のためには寄宿舎生が「特ニ規律アリ制裁アル一ノ切磋団体ヲ組織スル」ことを重視することが宣言されている。戦前の帝国大学において、寄宿舎を教育施設として長期間にわたって重視する方針をとったのは京都帝国大学だけであり、日本の大学史においてユニークな存在であった（例えば旧制期の著名な寮では恵迪寮や駒場寮があるが、寮では恵迪寮は北海道帝国大学予科生を主な対象として創設され、駒場寮は旧制第一高等学校の寄宿寮としてスタートしている）。

この経過に関する基本資料の一部が、2000年に刊行された京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史　資料編2』（この資料集の京都大学のサイト「京都大学学術情報リポジトリ」でも公開）の329頁～331頁に収録されている。また、以下の史資料からも京都帝国大学寄宿舎の様子を垣間見ることが可能である。

『京都帝国大学寄宿舎誌 明治編』（京都大学寄宿舎誌編纂委員会、2005年）

「吉田寮物語　第一回　創設から一時閉舎まで」『京都大学新聞』（1999年4月1日）

「吉田寮物語　第二回　近衛寮再開から終戦まで」『京都大学新聞』（1999年7月1日）

上田実「吉田寮史」（京都大学創立90周年記念協力出版委員会『京大史記』1988年に所収）

冨岡勝「京都帝国大学における寄宿舎「自治」の成立とその変化」（日本の教育史学『日本の教育史学』第38号、1995年）

冨岡勝「学生団体「自彊会」による京都帝国大学の校風改革運動」（『京都大学大学文書館研究紀要』第2号、2004）

2.1970年代における文部省の学生寮に対する見解

1971年に出された文部省の中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」では、寮について次のような見解が記されている。

> 一般的には、これまで学寮に期待された共同生活の教育的意義は他の方法によって生かすことを考えるとともに、勉学中の多数の学生に対し、相互の人間的な交流を深めたり、適当な食・住の便宜を供与したりするための生活環境を整備することを別途に検討すべきである。そのことが高等教育機関だけではじゅうぶんになしえないとすれば、国としても別に適当な方策を考える必要がある。

つまり、明治期以来、学生寮は厚生施設としての役割だけでなく、共同生活、それも学生の自治的運営による教育的役割が期待されてきたが、これを他の方法に代替しようという考え方が示されている。こうした考え方を背景として、1970年代後半から国立大学で建設された新規格寮（いわゆる新々寮）では、個室、寮食堂なしなどの共同生活による教育的役割を否定するような条件が定められてきた。また1980年代ごろよりプライバシーや個人生活の快適さなどを理由に、他人との接触の少ないワンルームマンションが学生の人気を集めていく事態が、学生寮の個室化と並行して進んでいった。

3.近年の各大学での学生寮への期待

しかし近年、学生寮が再び教育施設として期待される事例が見られるようになっている。

例えば朝日新聞の記事「学べる」学生寮へ進化中」（2015年2月6日朝刊）では、「安くて、古めかしい―。そんな印象もあった学生寮が変わり

つつある。生活の場から、就職活動も意識した「教育寮」としての役割を持たせる大学も出てきた」と述べ、早稲田大学の国際学生寮「WISH」（2014年春オープン）などを紹介している。この「WISH」では、全室個室だが原則4人でリビングを共有する、共有空間での寮生の交流を重視した、いわばシェアハウス型が採用されている。さらに、寮生は「社会のニーズに応え得る人材となる」ことを目的としたSOCIAL INTELLIGENCE　プログラムへの参加義務が課せられている。

またお茶の水大学で2011年に新設されたＳＣＣ（Students Community　Commons）は、4～5名単位の生活スペースである「ハウス」による日常的な交流による教育効果をコンセプトにしている。この学生寮のねらいについて、耳塚寛明・桂瑠以「学生寮への教育的期待 ：お茶大SCC の実践と課題」『京都大学高等教育研究』第19号、2013年では、この学生寮新設のねらいについて次のように説明している。

> ワーキング・グループでは、早々に個室主義を捨て「ともに住まいともに成長する新しい学生寮」を方針とすることにした。すでに完成していた図書館のラーニング・コモンズに次ぐ、第二のコモンズとして学生寮を位置づけた。いまの学生たちの多くは、かつてとは比較にならぬ「家族の庇護」のもとで成長している。入卒業式に出席する保護者の数は入学学生の倍を上回る。入学前のオープンキャンパスへの保護者の出席数もうなぎ登りで、子どもより積極的に質問する親が目立つ。加えて、高等学校をはじめ強力な「学校の庇護」のもとにも置かれている。学生たちを見ていると、大学の教員に対しても「きめ細かな」指導を期待していることがよくわかる。入学早々、時間割を組む相談に乗って欲しいと教授の研究室を訪れる学生も珍しくない。高校までの手取り足取り指導の効果である。もはや日本の青年期は、自律・自立を促す人間形成空間を欠いているのではないか。大人たちの庇護から解放された場、「他者との共生を強制する場」が必要ではないのか。

4.寮生活の自治と学習指導要領(「為すことによって学ぶ」 learning by doing をめぐって)

このように、近年、学生寮を共同生活による教育効果を期待する場として再び位置づける動きが現れ始めているが、学生寮の教育効果のポイントとなるのは寮生による自治の有無であろう。このことを示唆する資料の一つに、戦後の文部省学習指導要領がある。

1951年の文部省『学習指導要領一般編(試案)』では、戦後の民主主義教育のポイントの一つとしてホームルーム・生徒会・クラブ活動などの特別教育活動で「為すことによって学ぶ」(Leanig by doing)ことが次のように強調されている。Leanig by doingとは、アメリカの実践主義の教育者「ジョン・デューイ」が唱えた、教育理念である。

> 教科の学習においても、『為すことによって学ぶ』という原則は、きわめて重要であり、実際にそれが行われねばならないが、特に特別教育活動はこの原則を強く貫くものである。特別教育活動は、生徒たち自身の手で計画され、組織され、実行され、かつ評価されねばならない。もちろん、教師の指導も大いに必要ではあるが、それはいつも最小限度にとどめるべきである。このような種類の活動によって、生徒はみずから民主的生活の方法を学ぶことができ、公民としての資質を高めることができるのである

もちろん学習指導要領は高校段階までを対象としたものであるが、中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について」(資料5)でも大学における幅広い教養教育が強調されていることからも、大学では、「為すことによって学ぶ」教育を、より充実させていく立場にあるといえるだろう。

この「為すことによって学ぶ」は、失敗を経験し、失敗から生じる問題を解決することも含むと考えられる。単なる「利用者」としての寮生では、失敗を自ら経験することは難しい。人生の早い段階で、共同生活の中で自ら計画・組織・実行する経験ができるとともに、失敗とその克服の

取り組みも経験できるということは、ますます不透明になっていく21世紀を生きていく上で貴重な糧になると思われる。

以上のように考えてみると、吉田寮を含む学生寮の果たしている役割は、厚生施設としての役割とともに、共同生活での自治を経験することによる教育的役割が重要であるといるだろう。寮内で生じる様々な問題（ゴミ出し、寮内の共同作業などを含む）を寮生同士で直接話し合って解決し、決めたことを共同で実行するような寮生による自治が育つことで寮の教育的意義が高まると思われる。この意味で、大学は寮生を「福利厚生サービスの利用者」としてだけでなく、寮の共同生活を自治的に計画・組織・実行し続ける主体として認めていくことが、「対話を根幹とした自学自習」をスローガンとしている21世紀の京都大学において、有意義なことであると考えられる。

①吉田寮は、京都帝国大学時代より教育施設として重視された100年以上の歴史をもっていること、②1970年代に文部省の寄宿舎観（教育施設としての寄宿舎の否定）が登場しているが、③近年は各大学が寄宿舎の教育的役割に期待を示すような方針を採用しつつあること、④寮生活における寮生の自治の教育的役割は学習指導要領における「為すことによって学ぶ」原則とも関連があり「対話を根幹とした自学自習」を目指す21世紀の京都大学において重要であることを、歴史的資料、文部省関係資料、他大学の事例などを使って、以上の例のように説明することも可能なのではないだろうか。

「現在・過去・未来の寮生たちによって、寮生活のことが活き活きと説得力をもって発信され続け、まわりの理解や協力がますます広がり、寮生活がより豊かになっていく」、こんな長期的未来像を、元寮生の一人として心から願っている。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

「短評・文献紹介」欄の新設について

編集世話人（冨岡・谷本）より

次号より、「短評・文献紹介」の欄を設けたいと思います。

神辺会員より、「ニューズレターの活性化のため、仮に自分の研究報告を執筆しない号でも、興味関心ある他の同人の研究報告について論評するなどを行ってみたらよいのではないか。もっと論評や書評を取り上げれば、一方通行ではなく双方向の交流となって、ニューズレターが活性化するのではないか」という趣旨の提案をいただきました。

たしかに、このニューズレターに記事への論評や諸文献への書評を書くことで、各個人の研究の小まめな発表の場というだけでなく、相互の対話や発見が生まれやすくなるかもしれないと思います。

そこで気軽に論評や文献紹介をする欄として、「短評・文献紹介」の欄をつくろう考えました。字数の多い論評や文献紹介は独立した記事として扱いますが、字数の少ない論評や文献紹介をこの欄にどんどん掲載したいと思います。

例えば以下のような感じで書いていただけたらと思います。

> 学校をめぐる逸話と風景を纏めた神辺靖光さんの『続　明治の教育史を散策する』（2015年）は読んでいてとても面白いが、学校史・大学史の秘話やこぼれ話を纏めたものは我われが謙虚に学校史・大学史を学ぶうえでもやはり有益であろう。たとえば、大澤輝嘉「各キャンパスの福澤諭吉像」「学食の変遷」『慶應義塾　歴史散歩　キャンパス編』（2017年）などはそんな文献の1つであろう。（谷本）

同人のみなさん、「会員消息」同様、「短評・文献紹介」も、自身の研究報告記事の有無にかかわらず、ぜひ執筆してください。

同人以外のみなさん、コラム同様、「短評・文献紹介」へのご寄稿を歓迎いたします。

会員消息

新年明けの神戸新聞に、大学入試センター試験を控えた兵庫県内の受験生らが出石町にある加藤弘之（1836～1916年）の生家を訪れ、入試祈願のため加藤の胸像を触る…という記事（2018年1月12日）が掲載されていました。ちなみに加藤先生の生前の勉強法としては、徹夜などせず日々の規則的な学習態度を重視しています。また数時間も根を詰める読書などはよくないとして、適宜気分転換を行うことをおススメしています。まさに、肉体的にも精神的にも無理や負担のかからない勉強法や読書法といえるでしょう（「加藤弘之の勉強法のススメ」『1880年代教育史研究会ニューズレター』38号、2012年7月、5～6頁）。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/letter/1880Newsletter38.pdf

（谷本）

戦後俳壇を彩った俳人の金子兜太さんが98歳で旅立ちました。大正8（1919）年生まれの金子先生は旧制水戸高校で青春時代を送っています。実は私が学生時代の頃、旧制高校卒業生のインタビュー調査をしている中で、一度金子先生に直接お話をうかがう機会がありました。金子先生は一介の学生にも優しく接してくれ、旧制水戸高校の「大変自由」な雰囲気の中で俳句にやみつきになった話など、とても興味深くお聞きしたのを覚えています。

金子先生は海軍主計中尉として南洋トラック島で終戦を迎えています。戦争を肌感覚で知る世代には、私のような平成生まれの者には入り込めない領域があると、接するたびに常々感じます。先人の人生の経験を咀嚼できているか―。過去を生きた人々の想いに「寄り添う」姿勢が弛緩していないか―。こんな時代だからこそ、自覚を新たにしています。（金澤）

今回は日本大学所沢校舎にお邪魔しました。所沢に住み始めて1年半ほどになりますが、ここに来るのは初めてでした。閑静な住宅街の中ののどかな雰囲気で、芸術を志す学生には良い環境だとは思うのですが、来年には江古田キャンパスに統合されてしまうのだとか（芸術学部HP「新生江古田計画」参照）。いわゆる「都心回帰」ですね。若者の東京一極集中の傾向を是正するため、現在、23区の大学の定員増を原則10年間認めないとする法案が通常国会に提出されていますが、果たしてどうなることやら。なるべく交通等の便がよい都心で学びたいと思う学生と、なるべくたくさんの学生を確保したいと考える大学がある限り、いたちごっこが続きそうな気がいたしますね。（田中智子）

吉田寮のことばかりで恐縮ですが、今年1月、1950年代から1960年代始めにかけて寮生であった方々を中心とした同窓会に参加してきました。単なる思い出話ではなく、現在の生活のことや関心事について活発な意見交換も行われていて、50年以上前の寮内の雰囲気が伝わってきたように感じました。（冨岡）

本号のコラムは、『週間東洋経済』（2018年2月10日）を読んだ際に、神田眞人氏のインタビュー記事に「衝撃」を受けて執筆したものである。一読した感想は、「ケシカラン」という怒りさえ覚えたが、冷静になってみると、このような議論に対してどのような理論的な反論が可能なのかわからなくなってしまった。その気持を率直に書いてみたものである。勉強不足の勉強不足と言われるかもしれないが、それは今後勉強していきたい。なお、コラム執筆にかまけて、本文の記事を落としてしまった。12月に神辺先生から、激励をいただき、執筆する覚悟を決めていたのだが、既に2回もその覚悟が崩れている。「来月号からは」という宣言をして、新たに決意をしたい。（松嶋）

本ニューズレターＰＤＦファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader　などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用して A4 サイズ両面刷りに設定すれば A5 サイズの小冊子ができます。